

一筆啓上

作左通信



第九十三号 平成三十年十二月一日(土) 発行

「ふるさとが結ぶ心」 六ツ美西部小学校 校長 小田英宣

私は過去に、六ツ美北中学校に勤務していた。その当時、担任した生徒の結婚式に、出席する機会があった。名古屋の会場となっていたホテルに到着して、驚いた。六ツ美西部小学校の子供や職員が、たいへんお世話になっっている人たちにそっくりな方々が、ロビーの椅子に座っていたのだ。「苗字も違おうし、結婚する教え子の親族ではないはず」となると、この名古屋のホテルで会うはずがないか。」と、思い



ながら、少し近づいてみた。他人の空似ではなかった。お互いに、血のつながりはなくても、それぞれの家族のご子息・ご息女の結婚式に、出席し合う関係だという。つながりの深さを感じた。心のつながりの深さや強さが、私たち人間には大切なことは、

誰もがわかっている。だが、そう簡単につながるものではない。

十月下旬、社教委員会主催の「学区ふれあいウォーク祭り」が開催された。親子で、友達同士で、複数の家族でと、参加の仕方は様々であったが、歩きながら心と心がふれあう姿を、多く目

にすることができた。また、十一月下旬には、作左の会主催で、「ふるさと賞」の表彰式が行われた。これは、ふるさと六ツ美を詠んだ俳句と短歌の中で、優秀な作品が選ばれて、表彰される式である。活動の理念を「思いやり、絆を大切にすること、町おこし」とする作左の会らしい、価値ある取り組みであると感じることができた。

現在、日本の人口は、減少傾向

にあるというが、本学区や本校は増加している。新しい入居者も増えているということだろう。

そうした方々も含めて、学区民の心のつながりを、深め強めていくことが、子供たちに対してよりよい影響を与えていくことは、間違いない。そのために欠かせないのが「ふるさとを愛する心」であると考え。本学区には、前述の通り、この心を育むことができる取り組みが、多く行われている。本当にすてきな学区である。

先ほどの結婚式には小中学校時代の同級生が、多く招かれていた。ふるさとを振り返った時、ふと友の顔が浮かぶ。そんな心つながりを、小学校でも子供たちの心に芽生えさせていきたい。